

序 (不) 可視化されるコミュニティ

市野川 容孝

2014年度の研究プロジェクト「日本の地域社会（地域社会論）」は「(不) 可視化されるコミュニティ」を共通のテーマとして実施され、その報告書は同名のタイトルで刊行された（2015年4月30日発行、全239頁）。同報告書は、第1部「東京都における高齢者問題の諸相」、第2部「神奈川県藤野における移住民」、第3部「日本に在住する韓国の人々のヘイトスピーチをめぐる認識」、第4部「台北——ティアに占領された国際都市」の4つからなっている。

以下に掲載する3つの論文は、この報告書をもとにしつつ、あらたに書き下ろされたものである。

朴慧原「韓国人ニューカマー若者にとっての「ヘイトスピーチ」」は、すでに日本でも憂慮すべき社会問題となり、その法的規制が検討されているヘイトスピーチについて、韓国人のニューカマーがどのように考えているかを、インタビュー調査を通じて考察している。「在日特権を許さない市民の会（在特会）」等による排外主義的ヘイトスピーチは、主にオールドカマーの在日コリアンを攻撃対象としたものだが、ニューカマーもまたその対象となっている。ニューカマーは、この問題についてどう考えているか。

安齋耀太「人を呼ぶ人を受け入れる——移住者を集めるまち・神奈川県藤野の政策史」は、近年、マスメディアでも注目されている神奈川県藤野のまちづくり政策について考察している。1960年代の高度経済成長期に工場や企業の誘致によって振興がなされた多くの地域とは異なり、藤野は開発によって発展することが許されなかった。しかし、その藤野では芸術や教育を軸に、直接、人びとを集めるのではなく、人を呼びこむことができる人を呼び集めるという方法によって、移住者を集めてきた。

東悠介「高齢者の生活問題から見えてくる福祉の課題——足立区における高齢者問題への取り組みを事例に」は、高齢者が直面している生活困窮を「貧困」という枠組でとらえることの困難という認識から出発しながら、高齢者が地域社会で互いにつながっていくための孤立防止の取り組みについて考察している。東によれば、脇目もふらず働いてきた人ほど、退職後、地域で人間関係を築くことが難しく、物質的には貧困ではないとしても、孤立することで生活困窮に陥りやすいという。

最後に、調査にご協力いただいた方々すべてに、この場を借りて、あらためて深く御礼申し上げる次第である。